

インド・ベンガル地方における キリスト教ミッションとメディア

—19世紀のシラムプル (Serampore) ・ ミッションを中心に—

金 基淑

要 約

インド・ベンガル地方における近代的印刷技術はキリスト教ミッションによって始められた。19世紀前半にその重要な役割を担っていたのがイギリス・バプティスト系のシラムプル・ミッションである。このミッションは自らのプレスをもち、聖書の現地語の翻訳本、ベンガル語や英語の新聞・雑誌・教科書を多数刊行した。こうした新しい活字メディアを通じて伝わった西欧の知識や情報は、近代教育を受け植民地政府の行政官となった人々などを中心に形成された新知識人層に大きな影響を与えた。そして主にこれらの人々によって進歩的宗教・社会改革運動が展開されていったのである。一方、活字メディアはベンガルの保守派にも影響を与え、19世紀以降ヒンドゥー復古主義者たちも自らの活動のために出版物をうまく活用しており、進歩主義者との間にベンガル社会の改革をめぐる論争を繰り広げた。こうして活字メディアは19世紀のベンガル社会に新たな形での論争文化をもたらしたのである。

キーワード：ベンガル、シラムプル・ミッション、活字メディア、19世紀、新知識人

1 はじめに

インド・ベンガル地方はイギリスによるインド支配の重要な拠点の一つであったためにイギリスからの影響をさまざまな形で受けてきた。キリスト教宣教師たちによって始められた近代的印刷技術の普及もその一つであるが、これについてはあまり知られていない。ベンガルにおいて金属活字による印刷文化が本格的に花開くのは19世紀半ば以降である。その黎明期と言わべき18世紀末から19世紀前半にかけての約60年間、ミッションの出版事業は、主に布教活動用の冊子や聖書の刊行を目的としていたが、次第に刊行物の種類や部数を増やしていき、後には現地の知識人を巻き込みながら独自の活字メディアを展開していったのである。この間にキ

リスト教ミッションが果たした役割は大きい。

ベネディクト・アンダーソンは、すでに16世紀のヨーロッパにおいてプロテスタンティズムと出版資本主義の連合が、廉価な出版物の普及により、大規模な新しい読者層を急速に創出し、彼らを政治宗教目的に動員したことについて言及している〔アンダーソン 1997：79-80〕。さらに、19世紀インドネシアなどにおいてもこうした出版資本主義が、人々の心性・道徳面での革命をもたらし、新しい「想像の共同体」を作り出すことによりナショナリズムの出現を促したと述べている〔アンダーソン 1997：144-230〕。インドについても同様のことがいえる。19世紀に入ると、ベンガルではカルカッタ（現在のコルカタ）など都市部に住む新中間層が本格的に普及し始めた近代的印刷技術による出版物や新聞からの新しい西欧の情報に興味を示す一方、近代的学校教育を通じて科学

的新知識と英語を身につけていった。そして、インドの宗教・社会改革運動やナショナリズム運動に積極的に関わって行くのはこうした新エリート層であった。読み書きができない圧倒的多数の一般民衆の場合、大衆教育の普及にほとんど関心のない植民地政府のもとにあつては、前述のエリートたちのように新しい知識や情報に接することは難しかった〔チャンドラ 2001: 123-4〕。しかし、ベンガル語の新聞などの普及とともに、地方のバザールや人々が集まる場所では字が読める人によって新聞記事が朗読されたり、また印刷業に携わる人を通じてニュースやゴシップなどが伝えられた。一般民衆がこうした活字からではなく耳から入ってくる情報によって一部の情報を部分的にエリート層と共有する機会をもつこともあったが、19世紀を通じて活字メディアの享受の主役になることはなかった。

18世紀後半以降、イギリスの東インド会社はベンガル地方（カルカッタ）最大のプレスを経営していた。1600年に東インド地域と交易するロンドン商人の株式会社として設立されたこの会社は、1757年のプラッシーの戦いでフランスに勝利して以来、1858年の解散まで、実質的にイギリス政府の植民事業の下請け会社となって長年インドを統治してきた。こうした背景から、自らのプレスを所有することで、かつてさまざまな形で記録されてきた公文書を、安価で大量に印刷し保管・配布することを可能にし、従来のインドの行政形態に大きな変化をもたらしたのである。

本稿では、19世紀前半にベンガル地方で活動をはじめた、イギリス・バプティスト系のシランプル・ミッションの出版活動を取り上げ、ベンガル近代メディア史における役割と位置づけを明らかにするとともに、新しい活字メディアが19世紀のベンガル社会に与えた影響について考察したい。

II シランプル・ミッションの歴史と活動

ベンガル地方にはじめてキリスト教を伝えたのは16世紀末のイエズス会であるが、近代的教

団組織による布教活動を最初に行ったのは、バプティストのシランプル・ミッションといわれている。18世紀後半からベンガルで活動を行ってきたプロテスタント宣教団のなかでもシランプル・ミッションの名は広く知られており、聖書の翻訳や印刷、教育など、そのさまざまな活動は19世紀のベンガルの歴史において重要な意味をもつものとして評価されている⁽¹⁾。シランプル・ミッションという名称は南ベンガルのシランプル（コルカタから北西へ24キロほどの距離）という街を本拠地に活動していたためにつけられたのであるが、もとは1792年にイギリスで組織された「バプティスト・ミッシヨナリ・ソサイエティ（Baptist Missionary Society；以下BMSと記す）」の最初のインド支部である。フグリー川（ガンジスの支流）の辺に位置するシランプルは当時カルカッタから船で往来できる、比較的便利な場所であった。現在デンマーク領時代に建てられた教会と、シランプル・ミッションによって設立されたシランプル・カレッジの神学部の建物が当時の面影を残している。もとは「シュリ・ラム・プル（ヴィシュヌの化身、聖ラムのまちの意）」というヒンドゥー名前の街だったようだが、今はシランプル・ミッションの街として人々に記憶されているのである。

シランプル・ミッションの中心となった宣教師は、当時オリエンタリスト⁽²⁾として知られていたウィリアム・ケアリ（William Carey 1761-1834）である。ここでは、ケアリがシランプル・ミッションを立ち上げるまでの経緯とミッションの活動について概観したい。

ケアリは1761年、イギリスのノーサンプトンシャーの田舎街で手織職人の家に生まれた。家が貧しかったために学校教育をほとんど受けておらず、彼自身も靴職人などいくつかの仕事をして生計を立てていた。のちにイギリス国教会から離れバプティズムを受け入れてからはバプティストの牧師を務めていた。そしてBMSが組織された次の年の1793年に教団の宣教師として、家族とほかの宣教師と共にデンマークの船に乗ってカルカッタにやってくるのである。到着後、布教に適した場所を求めて移動を繰り返

した結果、北ベンガルのムドナバティ（マルダ県）という村でイギリス人のジョージ・ウドニが経営するインディゴ工場のマネージャとして招かれ工場の仕事の傍ら、宣教活動の準備をしていた。当時はまだ化学染料が普及する前で、インディゴ（藍）は天然染料の青色がとれる植物として珍重されていた。インディゴ栽培に適したベンガル地方にはイギリス人所有のインディゴ畑や製造工場が数多く存在していた。こうした工場には現地のインド人が労働者として働いており、彼らを相手に宣教師が布教活動を行っていた。ここでの滞在中ケアリはベンガル語の学習に励みつつ新約聖書のベンガル語訳に挑み、ついに完訳するのである。しかし、彼を取り巻く環境は依然厳しく、三男を病気でなくし、ウドニのインディゴ工場も閉鎖され収入源を絶たれてしまう。丁度この頃に本国のBMS本部から、新たに4人の宣教師とその家族がベンガルに向かった。1799年10月にカルカッタに着いた4人の宣教師、ジョシュア・マーシュマン（Joshua Marshman）、ウィリアム・ウォード（William Ward）、ドン・ブランズドン（Don Bransdon）、ウィリアム・グラント（William Grant）は、当初インドでの宣教活動に好意的でなかった東インド会社と植民地政府当局からの迫害を恐れ、イギリス領を避けて当時デンマーク領だったシランプル（後にイギリス領となる）での定住を望んだ。シランプルのデンマーク人のガヴァナー（Col. Ole Bie）が彼らの保護を約束し宣教活動を許可したため、1800年1月にはケアリも合流し、いよいよシランプル・ミッションが誕生するのである。残念ながらその後、グラントなどは早い時期に世を去ってしまい、結局ミッション活動に尽力していったのは、ケアリ、マーシュマン、ウォードのいわゆるシランプルトリオと呼ばれる3人とその家族であった。

シランプルをそのセンターとしてスタートしたシランプル・ミッションは、当初6人の宣教師の家族、合計19人が共同生活をし、収入や消費も共同管理していたようである。またそれぞれが責任をもつ仕事も決まっており、たとえばケアリは会計と薬箱の管理、マーシュマン夫妻は

教育関係、ウォードは印刷関係といった具合である。モラヴィアン⁽³⁾の生活スタイルの影響を強く受け、またイギリス本部からの多くの財政的援助を望めなかったケアリらは、自分たちの生計を立てるために、後述する印刷業や学校運営を始めることを決めたのである。さらに1801年には、ケアリが設立されたばかりのフォート・ウィリアム・カレッジ（カルカッタ所在）から、若い文官たちにベンガル語を教える教授として招聘され、収入や仕事の両方で新たな転機を迎えることとなった。

しかし1818年、若い宣教師たちと創立メンバーとの間に葛藤が生じ、若い宣教師たちはカルカッタに新たな自分たちのミッションを立ち上げ、残されたミッションはイギリスのBMSから独立した組織として独自の活動をはじめた。その後、1834年のケアリの死亡、つづいて1837年のマーシュマンの死亡によりシランプル・ミッションの第一世代の時代は幕が下りたのである。

シランプル・ミッションの布教活動は、現地人の改宗者が少なかったという結果⁽⁴⁾だけをみれば成功したとはいえないかも知れない。しかし、ミッション内で各宣教師が役割分担を通じて行ったさまざまな活動、なかでも現地子どもたちや若者のために開いた学校や大学⁽⁵⁾、および近代的印刷文化の導入などは19世紀後半以降に花開いていったベンガルの近代教育やメディア文化の礎石となったことは特筆に値しよう。

III 19世紀ベンガル地方における印刷文化

1 ミッション・プレス以前のベンガルの印刷事情

金属活字の印刷技術は16世紀半ばにイエズス会の宣教師によって西海岸のゴアに初めてもたらされ、それがベンガルに伝わったのは18世紀の後半のことである〔Chatterjee 1996: 271〕。活版印刷に必要なベンガル語の金属活字は1778年にオランダ領のチンスラ（カルカッタの北西40キロの所に位置）で作られたのが最初とされる〔ibid.: 272〕。インドでは一般的に古典など書物は写本によって伝えられ、各地には写本の仕事で収入を得る写本家が多数存在していた。こうした伝統もあって、近代的印刷技術が導入

された後もすぐに大量に印刷物が出回ることにはなかった。

ベンガル語の出版物の必要性を強く感じていたのはインド植民地政府の初代総督（在任期間1772-1785）、ウォレン・ヘイスティングズ（Warren Hastings）である。ヘイスティングズは、イギリス人の行政官たちがインドの言語、法律、文化などに熟知することを望み、まずはナタニエル・ハルヘドのベンガル語文法本の印刷を、当時チンスラの東インド会社の文官であったチャールス・ウィルキンスに依頼した。ウィルキンスはベンガル語の金属活字が作れる腕の良いベンガル人の職人を捜していたが、運良く鍛冶屋カースト出身で、長年金属器や武器に模様を彫る仕事をしていたボンチャンノン・コルモカルを見つけ出すことができ、この2人によって初めてベンガル語の活字が作られ、最初のベンガル語の文法本が刊行されたのである。当時、東インド会社やインド植民地政府は法令・規定集などの刊行の必要性を感じ徐々に印刷を行っていたのだが、まだインドでは印刷に必要な紙やインクなどの関連産業が十分に発達しておらず輸入品に頼らざるを得なかった。そのため印刷のコストが高くつき、普及までには次の世紀を待たなければならなかった。それでもカルカッタには東インド会社の印刷所と活字の鑄造場が設けられ、ベンガル語以外の言語の活字の制作や印刷も行われたのである。

18世紀の後半にはベンガル語の刊行物はまだ少なかったものの、主にヨーロッパ人を対象にした英語の印刷物（圧倒的多数）や、数こそ少ないがペルシア語、アラビア語などの刊行物もすでに存在していた。さらに、1778年から1779年の間にカルカッタではすでに東インド会社を含め24の印刷業者が286の出版物を出しているが、その全員がヨーロッパ人の業者であることから、当時の印刷業はヨーロッパ人社会を相手にしたビジネスであり、現地人の参入がほとんどなかったことがわかる。当時のカルカッタの印刷屋の主な仕事は、新聞広告、チラシ、カレンダー、年鑑、住所録などの制作であった。1780年から1799年の間には創刊された英語の新聞・雑誌が24に達し [ibid. : 278]、印刷業者が

こうした新聞広告の制作で収入を増やしていたものと考えられる。これらの新聞・雑誌の編集者も全員ヨーロッパ人の名前となっており、新聞・雑誌作りの実際の作業には現地人が関わっていたであろうが、インド人自らがメディアの中心的存在となったケースはこの時代にはまだみられないのである。

以上で述べた18世紀後半のベンガルの印刷・出版事情から、当時のヨーロッパ人の印刷業者の主な関心は印刷業というビジネスそのものであって、現地社会に出版文化を広めることに熱心であったというわけではなかったといえる。

インドではじめて部分的な州レベルでの近代的センサスが始まったのは1853年で、その後1881年に第1回インド帝国国勢調査が実施され、以降10年ごとに識字率を含め多岐にわたる項目について全国規模での国勢調査が行われた。それによると、1911年のインド全体の識字率はわずか6%に過ぎず、その10年後にも2%しか上昇していない [チャンドラ 2001 : 124]。英語はおろかベンガル語の読み書きもままならない圧倒的多数の人々は、当時はまだ近代的出版文化とは無縁の世界で生きていたのである。

2 シラムプル・プレスの役割と位置づけ

すでに述べたように、19世紀のベンガルの在地社会における出版文化の普及はキリスト教のミッションによって始められた。19世紀最初の40年間、その先鋒に立っていたのがシラムプル・ミッションである。当時のミッションが印刷技術に強い関心を示した最大の理由は布教に必要な現地語版聖書やキリスト教要理書の刊行のためである。特に初期の頃には、カルカッタなどイギリスの東インド会社領内での宣教活動が禁止⁽⁶⁾されていたために、各ミッションは小冊子や聖書のベンガル語訳本（後になると他の言語の訳本も刊行）の配布を通じてキリスト教という信仰を伝えようとした。まずここでは19世紀前半のシラムプル・ミッションの出版活動について述べたい。

W.ケアリは、福音はそれを受ける人々の母語で伝えるべきであるという、BMSの基本的な考え方に基づき、その実現のためにシラムプル・

ミッションを設立する前から新約聖書の翻訳と刊行に情熱を注いでいた。実は北ベンガルに位置するインディゴ工場のマネージャ時代に、自らベンガル語に訳した聖書を印刷するためにカルカッタからオークションで購入した印刷機を運んできたものの、植字工を見つけることができず刊行までには至らなかったという経緯がある。シランプルに来てからは、同じ宣教師のウォードが印刷技術の持ち主であったこと、カルカッタでベンガル語の金属活字を安く購入できたこと、自力で生活費を稼がなければならなかったことなどの背景から、1800年2月には共同生活のために購入したミッションハウスの一室にプレスを構えることとなった〔Chatterjee 1996: 282〕。以後この印刷所はシランプル・プレスと呼ばれるようになり、19世紀前半のベンガルの出版業界において重要な役割を果たすことになるのである。シランプル・プレスは19世紀前半、様々な言語による多数の聖書や冊子の翻訳出版、辞書・文法本の執筆刊行を行っており、またシランプル・カレッジや学校、およびフォート・ウィリアム・カレッジ、カルカッタ教科書協会(Calcutta School Book Society)などで使用する多くの教科書を印刷刊行した。さらに、ベンガル語、英語、ヒンディー語、ペルシア語の新聞や定期刊行物を発行し、現地社会に多くの情報を発信していたのである。

ベンガル人のコンポジッター1人、職人2人とともにスタートしたシランプル・プレスはすぐに千部単位で聖書(マタイ福音書など)を出版する傍ら、ミッションの財政を支えるために領収書や寄付のためのチラシなどの商業用印刷も行い、一ヶ月後には植民地政府からの注文も取り付けるほどの順調な滑り出しを見せている。同年5月には、前述の活字鋳造師のポンチャンノンをメンバーに迎え入れ、シランプル・プレスは新たな転機を迎える。さらにその後ポンチャンノンの娘婿のモノホル・コルモカルとその息子のクリシュナ・チョンドロ・コルモカルが植字工として加わった。以後シランプル・プレスは数々の実験を重ね、改良を加えながら発展していくのである。1804年にポンチャンノンが死んだ後は活字鋳造はもっぱらモノホルの責任のもとで行われた。当初プレスでは

ベンガル語の活字の数が限られていたため、腕のいいベンガル人の活字職人が合流することにより、3種類のベンガル語活字フォントを完成させ、またサンスクリット語、オリヤー語、マラーティー語などの活字も作ったのである。さらに、シランプル・プレスのモノホルによって中国よりも先に漢字の金属活字が作られたのは画期的な出来事というべきであろう〔ibid.: 288〕。こうしてシランプル・プレスでは48言語のための18の異なる字体の鋳型を作ったとされる〔ibid.: 295〕。このようにさまざまな言語の金属活字の鋳造に力を入れていたのは、それらの言語による聖書や冊子の刊行のためであり、またイギリスからの高価な輸入品やカルカッタのほかの業者に頼ることなく、自分たちで作ることによってコストを抑え、より廉価な印刷物を提供するためであった。18世紀後半のベンガルに住むヨーロッパ人の印刷業者たちとは異なり、シランプル・プレスでは現地の社会に働きかけて近代的出版文化への関心を現地の人に持ってもらうよう努めていた点で特に重要な役割を果たしていたと言える。

プレスはまた徹底したコスト削減策の一環として、1811年からはミッション内で独自の方法で紙の生産を始めた。当時インドのほかの印刷所と同様に、シランプル・プレスもほとんど英国製の紙を使用していたため、そのコストは相当なものであった。なんとか現地で紙を生産しようとインドではじめて蒸気エンジンをつけた機械で、英国製には劣るけれども安価な紙の製造に成功している。当時としては珍しいこの蒸気エンジンが話題になったことも手伝って、シランプルペーパーの需要も伸び、シランプルは1867年までにインドにおける重要な製紙センターとなったのである〔ibid.: 297〕。のちにこのペーパーミルは、アジア市場での英国製の紙との競争を警戒していたイギリスの圧力により、1867年にベンガルのロイヤル・ペーパー・ミルに吸収されてしまった。当時のさまざまな刊行物をそこで生産された製紙でまかなっていたことを考えると、紙は安いだけでなく十分使用に耐えるものであったことが推測される。このミルの年間生産量については不明だが、数少ない宣教師と現地人のメンバーだけで英国製と

の競争が懸念されるほどの生産量を維持していたことは驚きである。シラムプル・ミッションが紙の供給面からも19世紀前半のベンガルの出版文化に多大な貢献をしていたことがわかる。

次に、シラムプル・プレスの果たした役割を考察する際によく取り上げられるのが、現地語とミッション系出版物の関係である。すでに述べたように、ケアリは生涯36のインドの諸言語で新約聖書の全部または一部を翻訳刊行（1800-1832年の間）しており、さらにこのプレスからは中国語、ビルマ語、アラビア語、マレー語、シンハラ語、ジャワ語などを含むインド内外の10の言語による聖書も翻訳刊行している。1800年から1832年までのこれらの総刊行部数は約20万部（年間平均6600部）を超えており [ibid.]、また年間10万部の配布用の冊子やパンフレットも印刷していた。インド以外のアジアの多数の言語にも聖書などが翻訳されたのはこれらの地域での宣教活動を念頭に入れたことである。聖書以外にインドの古典のラーマヤナやマハーバータ、伝記類、文法書、書簡もベンガル語やヒンディー語、アッサム語などに訳され全インドに配布された。ケアリは東洋の言語に強い関心を示し、ベンガル語、マラーティー語などの辞書、ベンガル語、サンスクリット語、パンジャーブ語、テルグ語などの文法書も執筆している [ibid. : 298]。

以上で述べたような、シラムプル・ミッションによる新約聖書や福音書を含む膨大な数の翻訳本はどのようにして生まれたのだろうか。ケアリ、マーシュマン、ウォードなどは、イギリスの「英国&海外バイブル協会（The British and Foreign Bible Society）」から聖書の翻訳刊行のための財政的援助を受けていた。ケアリがカルカッタのフォート・ウィリアム・カレッジで教鞭をとっていたため、そこでさまざまな言語を教えていた教員（パンディット）たちに翻訳作業を依頼したといわれている。実際の翻訳のやり方を紹介すると、高度のベンガル語能力を身につけていたケアリのベンガル語訳本が元本となってベンガル語以外への翻訳がなされた。この作業はベンガル語ともう一方の第2の言語の両方がわかる人によって行われたのである。そし

てさらにつぎの第3の言語への翻訳のために雇われたパンディットは、おそらくベンガル語は理解できず、ベンガル語から訳された第2の言語の翻訳を理解し、その翻訳版をもとに第3の言語へと翻訳していたようである [Sen Gupta 1971 : 90]。こうした翻訳物は最後に必ずケアリがチェックを行ったとされており、ケアリ自身もそれを認めている。現地語への翻訳作業がこうしたやり方で行われていたとすれば、ケアリの名前で刊行された多くの翻訳本の出版はインド人のパンディットの協力なくしては実現困難だったと思われる。

ケアリは1834年、その生涯を終えるまで新約聖書や福音書の訳本の修正に努めつづけ、彼のベンガル語版新約聖書は版を重ね第8版まで刊行されていた。ベンガルで過ごした41年間、ベンガル語をはじめとする現地語に強い関心を持ち、ひたすらその習得に励んでいたケアリの現地語、特にベンガル語能力は相当高いものだったと考えられる。にもかかわらず、シラムプル・プレスから刊行されたケアリなど宣教師たちの現地語翻訳本に対する評価は両極端に分かれている。すなわち、それは現地語の言語学的発展に寄与したというものと、満足のいかない翻訳だというものの二つの見解である。前者のような評価は主にシラムプル・ミッションを中心としたミッション側によるものが多い。たとえばインガムは、「ミッションによる聖書の翻訳と現地語での冊子が、現地語の構造的統一と発展に貢献した [Ingham 1956 : 97] 」と高く評価しており、今日シラムプル・カレッジの公式見解もこれに近いものがある⁽⁷⁾。一方、批判的な立場からは、難解な文法や間違った言葉遣い、および英語的表現の多い点なども指摘されている [Sen Gupta 1971 : 91, 96]。当時からシラムプル・ミッションの出版物にみられる不自然なベンガル語の使用法は「シラムプル・ベンガル語」といわれ、今日でも人々の間で話題の種になっているようである。

シラムプル・ミッションによって翻訳されたベンガル語のさまざまな刊行物が、ベンガルの言語学や文学の発展に貢献したか否かという問題は本稿の目的ではないため、ここでは言及を

避けるが、こうした問題とは別に、翻訳本などが現地人や現地社会に与えた影響は決して無視できないであろう。私がここ数年人類学的調査を行っている中部ベンガルのノディア県には、19世紀前半までに東インド会社などのインディゴ工場が多く建てられており、そこで働いているベンガル人労働者への宣教活動のために英国国教会の宣教師が訪れていた。はじめは一人の改宗者も得られなかったのだが、現地の人々にケアリが翻訳した『マタイ福音書』を無料で配布していたという。この福音書がたまたまベンガル・ボイシュノブ（ヒンドゥー教のビシュヌ派）の一セクトである「シャヘブドニ（Shaheb Dhani）」のグルーの目に留まり、思わぬ展開をみせることとなった。人間の平等や神への完全な帰依を訴え、チョイトンノ（Chaitanya）^⑧を主たるグルーとするシャヘブドニは、キリストの自己犠牲の精神や教えに共鳴し、イエスを自らのもう一人のグルーとして受け入れたのである。現在、ノディア県にはシャヘブドニからキリスト教に改宗した人々があり、彼らの宗教実践にはボイシュノブとキリスト教の習合形態が見受けられる。こうした事例にみるように、英語で書かれた聖書が現地語に訳されたからこそ現地の一般民衆が読むことができ、さらに在地社会の宗教にも大きな影響を与えていたことがわかる。

ケアリの死後、シラムプル・ミッションの活動は衰退しはじめ、拠点がカルカッタのほうへ移され、活字鋳造場も閉鎖されたが、製紙工場だけは19世紀の半ばまでに生産を続けていた。しかし、ここで花開いた印刷技術の伝統は葬られることなく、ベンガル社会のなかで受け継がれていったのである。シラムプル・プレスを中心人物であったモノホルとその息子のクリシュナはその後、自分たちの活字鋳造場と印刷所を立ち上げ、仕事を始めていた。自ら作った鉄製の印刷機で行った彼らの仕事は値段の安さと技術の高さで評判であった。中でもパンジカ（ベンガル暦）は年間発行部数が5千部まで達するほど人気があったという〔Marshman 1850〕。

以上で述べたように、シラムプル・ミッションとそのプレスは、19世紀前半のベンガル社会に、

近代的印刷による出版文化の普及に重要な役割を果たしていたといえる。特に当時としては貴重なベンガル語活字の鋳造を自ら行い、常にその改良に努めていたことやコスト削減のために製紙業を起こし、さらにベンガル語など現地語の定期刊行物を発行し、現地社会に新しい情報を伝達しようとしたことなどから、やがて本格的に迎えるベンガルのメディア文化の確固たる土台の一部を築く役割をシラムプル・プレスが担っていたことは驚嘆に値する。しかし、この時代の活字メディアの利用者は主に読み書きができる一部の階層に限られていた。文字が読めない圧倒的多数の人々は、識字層を経由して、または巷のうわさ話で伝わってくる情報を部分的ながら共有するのが一般的であった〔Bayly 1996: 204, 240〕。したがって、次章では現地社会における活字文化と情報を取り巻く問題を、主に識字層を対象にして考察していきたい。

IV 新しい「情報」・「知識」と現地社会

1 ミッション・ジャーナルと新しい「情報」・「知識」

ベンガルでは金属活字による活版印刷文化が幕を開いた18世紀後半にはすでに多数の新聞・雑誌が発行されていた。ただし1780年から1799年の間に発行された24の新聞・雑誌をみるとすべてが欧米人を編集長とする英字メディアである〔Chatterjee 1996: 278〕。当時こうした英字ジャーナルの読者層を構成していたのはほとんどがベンガル在住のヨーロッパ人と、少数の近代的教育を受けた英語がわかるベンガル人だったと考えられる。

ベンガルに進出した欧米のミッションも英語やベンガル語の新聞・雑誌などジャーナルを多数発行していた。なかでもシラムプル・ミッションはパイオニア的存在であり、最初のベンガル語の月刊紙『論評（Digdarsan, 1818-1821）』を発刊している。このわずか24ページの雑誌の目指すところは、ベンガルの若者の「探求精神を鼓舞するとともに情報を広める」こと〔Sen Gupta 1971: 130〕であると記されている。その内容は、刊行目的にふさわしいもの

で、旅行や地域のイベントなどから、ニュートンの万有引力の法則のような科学的なものまで実に多様であった。主にヨーロッパから発信された近代的知識や有用な情報などに触れることで、インドのものとは異なる新しい知の世界に刺激を受ける者が増え、さらには探求精神を養うことをも期待したのであろう。この月刊紙は評判がよく、カルカッタ教科書協会の要請を受け英語版を発行するまでに至った [ibid.]。この英語版は学校の教科書としても使用され、新しい知識・情報を教育の現場に伝えるとともに、現地の若者の英語教育にも一翼を担っていた。

シランプル・ミッションは1818年にベンガル語の週刊紙も発刊している。『ニュースの鏡 (Samachar Darpan)』という名前のこの雑誌は、名前が示しているように新刊書籍の内容紹介、著名人の結婚・訃報、新しく制定された法令・規定の紹介など、ヨーロッパやインド各地からの様々なニュースを、主にほかのジャーナルから引用しコメントなどをつけて伝えていた [ibid.: 131]。廃刊までにペルシア語版の発行 (1826)、ベンガル語・英語の同時使用、週2回発行などのような試みを行いながら、現地社会にインド内外からの情報の伝達に努めており、ベンガル・ジャーナリズムの黎明期において一定のレベルを維持していたとされる。その結果、カルカッタの人々の間でこの週刊紙の人気は高く、タゴール家の人も購読していたようである [ibid.: 132]。これらの雑誌の編集は、その発行責任者は当然宣教師 (John Clark Marshman) となっているが、実際ニュースを集めたりベンガル語で記事を書いたのはベンガル人の著名なパンディットたちとされる [ibid.]。シランプル・ミッションが行った聖書の翻訳がそれぞれの言語に堪能で学識者たちでもあったムンシ (ウルドゥー語やアラビア語の教師またはライター) やパンディットの協力なしには不可能であったし、シランプル・プレスでのベンガル人の職人の技術と努力なしにはベンガル語などの活字の鋳造・印刷が困難であった。ベンガル語の雑誌の編集や制作においても現地人の協力が必要であった。しかし、宣教師の残した記録などには現地人の果たした役割について触

れた部分のごく限られており、ベンガルにおいてもこれまでそうした現地人たちの活動はあまり知られてこなかった。

シランプル・ミッションが発行したベンガル語版ジャーナルの特徴として、宗教や政治に関する話題または論争を一切避けていた点をあげることができる。政治的論争を扱わなかったのは、イギリス植民地政府や東インド会社を刺激しないためだったかも知れない。

布教活動という最大の任務を抱えたミッションが現地人向けの雑誌にキリスト教に関する記事やインドの宗教への批判を掲載していないのは意外と受け止められるかも知れない。これも政治的課題と同様に、キリスト教や布教活動に反感をもっているベンガル人を過度に刺激しないようにという考えに基づいた戦術もあったかも知れないが、こうした理由よりも、ほぼ同じ時期に現地人に配布するための宗教的冊子や雑誌が別途に刊行されていたためであろう。ベンガル語版宗教雑誌の第一号は、ロンドン・ミッションナリ・ソサイエティが発行した *The Gospel Magazine* (1819-1823) である。シランプル・ミッションは1818年に、宣教活動に関する報告や教育などを盛り込んだ月刊紙 *The Friend of India* (1835年に週刊紙に変更) を発行しているが、これは1808年に宣教活動の進捗状況を掲載した *Monthly Circular Letters* の拡大版である。さらに1822年には改宗者用のベンガル語版週刊紙 *Increase of the Kingdom of Christ* を発行している。そのほかにもベンガルで活動している他のミッションと合同でいくつかの宗教的ジャーナル⁽⁹⁾を発行している。

シランプル・ミッションのジャーナルでは、一般のベンガル人向けの雑誌に、布教のための宗教的内容を盛り込まないというやり方をとったが、アッサム地方 (1836年に英国支配下に置かれ、1874年までベンガル・プレジデンスに併合) におけるアメリカン・バプティスト・ミッション (以下ABMと記す) の雑誌では宗教的な内容も入っている。アッサムで宣教活動を始めたA B Mはアッサム語版月刊紙『夜明け (Orunodoi)』(1846-1880)を発行していた。刊行目的は「探求精神に火をつけ、それを育む

ことである」[Sharma 2003: 260]とされ、その主な内容は宗教、科学、一般知識で構成されている。宗教コーナーを設けているところがシランプル・ジャーナルとは異なるが、世俗的で近代的な知識や有用な情報を導入することによって現地人の「探求精神」を促し、それが結果的に「前近代的な」インドの宗教・生活習慣などを改めキリスト教を受け入れることにつながると考えているところは同じなのである。ミッション系ジャーナルの読者層はあくまでも中間階層以上の識字層であるため、自然にジャーナルなど活字媒体を通じての布教のターゲットはこの層ということになる。しかし、ミッション側の望みとは裏腹に、『論評』や『ニュースの鏡』、『夜明け』の読者はキリスト教についてはほとんど関心を示さなかったのである。『夜明け』の読者の大半を占めていた上位カーストのヒンドゥーたちは、編集者がもっとも重要な事と考えていた宗教的メッセージではなく、一般知識やアッサムの教育・言語・社会改革について強い関心を示し、寄稿を通じて熱い論争を繰り広げていた[ibid.: 262、269]。当時ベンガルにおいては新しい事業や貿易で成功を収めたり、近代的教育を受けて植民地政府の行政官となった人々を中心に中間・新知識人層(ボッドロロク=bhadralok、一般にバブと呼ばれる)が形成されはじめていた。また、地方では18世紀末から行われた土地制度の改革により、新しい中小の土地所有者が成長してきた。主に中・高位カーストからなるこれらボッドロロクたちは、政治・経済・社会の変化に伴う新たな秩序の形成に敏感に反応し、そのために役立つ情報などに強い関心をもっていた層である。そして、やがて彼らはベンガルの近代化と宗教・社会改革を求める「ベンガル・ルネサンス」⁽¹⁰⁾の中心勢力となっていくのだが、彼らに活字メディアを通じて近代的な知識や情報を提供したのがミッション系のジャーナルであった。しかし、先発走者のミッションを見習って現地人によるジャーナルも誕生し、両方の紙面を通じて宗教・教育・政治・社会改革などさまざまなトピックスについて論争が繰り広げられることとなった。ベンガルにおいてはサ

ティー(寡婦殉死)、女兒嬰兒殺し、女性の地位問題、キリスト教などがもっともホットな論争の材料であった。なかでもシランプル・ミッションと、「近代インドの父」と言われる、ベンガルを代表する新知識人のラムモホン・ライ(Rammohan Ray 1774-1833)とのキリスト教をめぐる論争は有名である。

ミッションの布教活動は主に教会や道端などでの説教、宗教的内容をわかりやすく書いた、20ページ以下の小冊子⁽¹¹⁾の配布を通じて行われていた。その内容は概ねキリスト教の要理について説明しつつ、ほかのインドの宗教と比較し、最終的にキリスト教が唯一の真の宗教だという結論に到達するというものである。言い換えれば、ヒンドゥー教などは迷信に満ちており、魂の救済はキリストを通してのみ可能であるということである[Sen Gupta 1971: 94]。こうしたミッション側によるインドの宗教への批判については多くのベンガル人が不満をいっていた。ラムモホンは『イエスの教え—平和と幸福への導き』⁽¹²⁾の序文において、キリスト教が「汝の欲することを他に施せ」という道徳的教えを主要な教えとして説いていることを高く評価し、こうした道徳的教義は明らかに人類全体の平和と調和の維持に向かう傾向をもつと述べている[竹内1991: 134-5]。こうしたラムモホンの考え方に対して、前述の*The Friend of India*(第3巻20号)などにおいて、宣教師のマーシュマンなどが批評を加え[竹内 1991: 143]、さらにラムモホンが出版物を通じてこれに答えるという具合で論争が続いたのである。紙面の関係上ここでそれぞれの論争の詳細について述べる余裕はないが、ミッション系ジャーナルがその刊行目的としてあげているように、19世紀の前半において現地人の「探求精神」が様々な活字メディアを通じて啓発されていたことは当時の活発な「論争」を通じてみることができよう。こうした論争は、サティー、女兒嬰兒殺し、寡婦再婚禁止などに対する世論の醸成に寄与し、これらを禁ずる法律制定に拍車をかけたのである。

2 新しい活字メディアとヒンドゥー復古主義

インドの19世紀は「改革の時代」と言われ、ベンガルの新エリートグループの中からは多くの宗教・社会改革者が現れるのだが、彼らもまた自らの主義主張を広めるために、組織を結成し機関紙を刊行するなど積極的に活字メディアを活用していた。なかでももっとも有名なのが1828年にラムモホン・ライが設立した宗教協会、「ブラフモ協会 (Brahma Samaj)」である。その設立目的はヒンドゥー教を浄化し一神教を唱えるという、オーソドックスなヒンドゥー陣営からすれば納得し難いものとなっている。同協会の理念は理性、およびヴェーダとウパニシャッドの二大柱に基づいており、愚像崇拜に反対しサティーや女兒嬰兒殺しなどヒンドゥー社会の「悪」とされるものを批判した [チャンドラ 2001: 128、竹内 1991: 53-56]。ラムモホンは自分の見解を広めるために新聞や定期刊行物を巧みに利用しており、インドのジャーナリズムの発展に貢献したと言われている。たとえば、1821年にベンガル語の週刊紙『知識の月光 (Sambad Kaumudi)』、1822年にペルシア語の週刊紙『知識の鏡 (Mirat-al-Akhbar)』を発刊しており、サティーなどを批判した冊子⁽¹³⁾もつくった。

ヒンドゥー教の保守派側もブラフモ協会に対抗し、ボバニチョンドロ・ボンダパッダエが機関紙『ニュースの月光 (Samacar Candrika)』を発行 (1822) し、続いて「法協会 (Dharma Sabha)」を結成 (1830) して活動を行っていた [竹内 1991: 56]。この団体は保守的で、伝統宗教と社会を擁護することを目的としており、サティー禁止令などに強く反対する立場を機関紙などを通して貫いていた。

以上で述べた二つの事例以外にも19世紀のベンガルには、改革・保守を問わずさまざまな団体が活動をしていた。なかには「ヤング・ベンガル (Young Bengal)」⁽¹⁴⁾のようにあまりにも急進的だったために民衆とのつながりをもてなかったものもあるが、どの団体も普及し始めた活字メディアを積極的に活用し、論争を繰り広げていったのである。

一方、19世紀にベンガルと内陸部にはインド新聞を読む者が30万も存在していたとされてお

り [Bayly 1996: 239]、もはや新聞を通じて伝わる内容の影響は無視できなくなっていたようである。特に多くの人々が関心をもつ巡礼 (yatra) や寄付 (dan) や結婚 (shadi) などの新聞記事は繰り返し掲載されることによって、結果的にヒンドゥー的美徳や価値観を再認識できる装置としての役割を担っていたと考えられる。さらにイギリスがやってくる前は小さな一漁村に過ぎなかったカルカッタの教育を受けた人々が話す言葉が、スタンダードベンガル語とされ [Marshall 1987: 174]、それがメディアの標準語⁽¹⁵⁾となっていたのである。当時東ベンガル・ダッカの男性たちのなかには、カルカッタのバブ (ジェントルマン) のようなしゃべり方を学ぼうとしていた者もいたといわれる。このようにメディアによって「標準ベンガル語」やベンガル・ヒンドゥー文化 (あるいはイスラム文化) のようなものが活字で表現され固定されていくことになり、次第に人々の間で共有されていったのであろう。

19世紀の半ばからは多くの都市でカースト団体が多数組織されるようになるのだが、彼らの活動にも活字メディアが活用されている。この時期から20世紀半ばまでの百年以上の間に、インド各地で中間・下位カーストを中心に、カースト地位向上運動が盛んに起きており、自らのカーストの地位向上を推進し権益を確保するためにカースト団体が結成されたのである。カーストの儀礼的地位に関する人々の意識の問題は、植民地時代のイギリスによる国勢調査と深い関係がある。植民地時代のインド全土レベルの国勢調査は全部で8回実施 (1871-1941) されたが、カーストは常に最重要調査項目とされ、1901年の調査でのように、カースト集団の地位の詳細が記述されることもあった。本来インド社会で個人の集団への帰属意識は、カーストをはじめ職業、出生地、外婚・内婚集団など複数のものからなっており、一つだけに固定されるものではなかった。しかし、センサス調査の記録によって、前述のような状況依存的な帰属意識が固定化・実体化され、人々は自らのカーストの地位を強く意識することとなったといわれる [三瀬利之 2002: 51-55]。さらにセンサスのカースト関連のデーターは行政側によって

も活用され、独立後も政治的に重要な指標となっている。その結果、多くの中間カースト以下の集団が自らの地位向上運動に積極的になったのである。一般にそうした集団はまず運動のリーダー（多くの場合、教育を受け経済的に豊かな者）を選び、その人を中心にさまざまな活動をしていく。その活動の中でも特に重要なのは、モデルとすべき自分より上位のカーストの文化要素を模倣することである（これはサンスクリット化と呼ばれる）。これら模倣対象の文化要素をリストアップして印刷し、その実践のためにカースト成員に配布する〔金基淑 2000:232-252〕。さらに他の地域に住むカースト仲間との連携をとるために、互いの名簿を作成することなどが活発に行われるようになった。こうした、便利で確実な活字手段は20世紀にはいるとさらに高度になっていき、ベンガルの全地域に住むカースト仲間に向けてのチラシ作成や広告を出すに至る。こうしてかつては決して互いに知ることのなかった、遠く離れた地域のカースト仲間との繋がりを意識し連携を強めていくのである。

以上のように、19世紀の活字メディアは、一方では、西欧の近代的知識・情報を伝えることにより新たな知識人層を生み、確実にベンガル社会に進歩的改革をもたらした。他方では、人々が自らのカーストへの執着を強める役割を担い、逆に古い伝統への回帰を助長するなど、これら活字メディアはインド・ベンガル社会にダイナミックで重層的な変化を引き起こしていったのである。

V おわりに

本稿ではシランプル・ミッションの中心となった宣教師ケアリのさまざまな活動、とりわけ聖書のベンガル語への完訳、さらにはシランプル・プレスで行われた金属活字による多言語での聖書や冊子の翻訳・出版、新聞や定期刊行物の発行などについて述べ、その果たした役割についても言及した。それらを整理すると次の通りである。

①現地のベンガル人を対象に多くの社会的・文化的情報を発信した。

②ベンガル語、英語、ヒンディー語、ペルシア語に加え、サンスクリット語、オリヤー語、マラーティー語の活字さらには中国よりも早く漢字の金属活字を作った。

③多数の言語による刊行物を自らの製紙技術によって作った紙で印刷した。

④カルカッタなど都市部に住む新中間層たちが出版物を通して新しい西欧の情報に興味を示し、教育を通じて、新エリート層の形成を促した。

⑤出版文化の面で極めて大きな役割を果たし、インド社会に大きな変革をもたらした。

シランプル・ミッションの布教活動は、現地の子どもたちや若者のために開いた学校や大学、近代的印刷文化の導入など、19世紀後半以降に花開いていったベンガルの近代教育やメディア文化の礎石となった。新しい事業や貿易で成功を収めたり、近代的教育を受けた中間・新知識人層（ボッドロク）は、政治・経済・社会の変化に伴う新たな秩序の形成に敏感に反応し、やがてベンガルの近代化と宗教・社会改革を求める「ベンガル・ルネサンス」の中心勢力となっていった。西欧の近代的知識・情報を伝えることにより新たな知識人層を生み、確実にベンガル社会に進歩的改革をもたらしたが、他方では、逆に古い伝統への回帰を助長する場合もあった。

東インド会社はキリスト教の布教活動がイギリスのインド支配に否定的な働きをすることを憂慮し、布教には好意的ではなかった。ミッションの側も東インド会社に必ずしも好意的というわけではなかったが、さまざまな出版活動を展開する中で現地社会に西欧文明を伝える役目を担うことになり、結果的にイギリスの植民地支配の土台作りに寄与することになったといえる。

しかし、シランプル・ミッションは布教という枠を越えて、「ベンガル・ルネサンス」を生み出して、「進歩と回帰」「近代思想と伝統思想」といった絡みのなかで、活字メディアを通じてインド・ベンガル社会にダイナミックで重層的な変化を引き起こしていったのである。

注

1) [Banerjee, T. 2000]、[Chatterjee, S. K. 1996, 1999] 参照。

- 2) 英領インドにおいて、現地人の教育方針をめぐってオリエンタリストとアングリシストの間で大きな議論が繰り広げられた。前者は、西欧の科学と文学は学生が職を得るためには教えるべきだが、重点はインドの伝統的学問の普及や現地語の学習に置かれるべきだと考えていた。これに対し、アングリシストは、西欧の近代教育を英語のみを通じて教授すべきだと主張する。結局この議論は、1835年、マコーリイ覚書をもとに、アングリシストの主張に基づいた教育のために政府の資金があてられたことで一応決着がついた（チャンドラ 2001：121-2）。
- 3) モラヴィアンは1777年から1791年までにシランプルに支部を開き布教活動をしていた。彼らの三つの宣教方針、すなわち現地語での説教、聖書の現地語への翻訳、初等教育の開始は、当時のほかのプロテスタントの宣教活動に多くの影響を与えた [Sen Gupta 1971：19、32-3]。
- 4) 1821年までにシランプル・ミッションの改宗者の総数は、1407名と報告されている [Sen Gupta 1971：141]。現在シランプルには、インド有数の神学部を抱えるシランプル大学があるにもかかわらず、大学関係者を除きクリスチャンの数は極めて少ない。
- 5) シランプル・ミッションは1818年、インド人のクリスチャンを養成し、西欧教育を普及させる目的でシランプル・カレッジを設立したが、それはケアリらの財政的・教育的な支援によるものであった。1827年にはデンマーク王の認可（Royal Charter）を得て、学生たちに学位を授与する、アジア初のカレッジとなった。1949年からはインド人が学長を務めている。現在、神学部はインド内外からの多くの留学生が学ぶ名門であり、宗教とほかの学問をともに教わるインドで唯一のカレッジである [Banerjee 2000：56-57]。
- 6) 当初東インド会社は宣教師の布教活動に対して、シランプル以外の地域での布教の禁止、イギリス東インド会社管轄区内でのミッションセンター設立の禁止など、様々な制限を設け圧力をかけていた。しかし1813年、イギリス議会によって更新された東インド会社の特許状において、東インド会社管轄区内での布教活動が事実上認められた [Chatterjee 1999：11-15]。
- 7) シランプル・カレッジの出版物やシランプル・ミッション関連の催し物においては常にケアリたちの功績が称えられる。
- 8) ヒンドゥー教ヴィシュヌ派の一つであるチャイタニヤ派の開祖（ベンガル出身）。神々への絶対的帰依（バクティ）を説き、クリシュナとラーダーを崇拝する熱狂的宗教運動を起こし、ベンガル、オリッサのみならず、北インドにおいても多大な影響を与えている。
- 9) *The Missionary Intelligence, The Missionary Herald, The Missionary Chronicle, The Asiatic Observer, The Calcutta Christian Observer*などがある。
- 10) 19世紀から20世紀にかけて、西欧文化や前の時代のベンガル文化の影響によって起きた、ベンガル文化全般にわたる近代化の動きである。宗教・社会などにおける改革思想や近代ベンガル文学・芸術の面で大きな収穫を得ている。
- 11) 小冊子は一般に散文で書かれたが、韻文のものもある。その種類は主に①インドの宗教やカーストなどの社会制度に対する批判②キリスト教の宗教的特徴の紹介③礼拝用の賛美歌・祈祷書などの三つからなっている。これらには英語冊子から翻訳したものと宣教師・改宗者・宣教師の友人などが現地語で書いたものがある。
- 12) *The Precepts of Jesus the Guide to Peace and Happiness. In Works, II, pp. 1-74*
- 13) Sahamaran Bisaye Prabartak O Nirbartaker Sambad（未亡人を生きながら焼く慣習についての支持者と反対者の討論）. *In Works, I, pp. 295-310, Abstract of the Arguments Regarding the Burning of Widows Considered as a Religion Rite*（宗教的儀式として未亡人を焼死させることに関する議論の要約）. *In Works, I, pp. 347-356* [竹内 1991：65-66] などがある。

- 14) 1820年代後半から1830年代にかけて、アングロ・インディアンのヘンリ・ヴィヴィアン・デロジオ(1809-31)の指導のもとで行われた、ベンガル人知識人の間に広がった急進的で民族主義的な運動である。東インド会社の特許状の更新、出版の自由、陪審員制上級官職へのインド人採用など、植民地支配下でインド人の権益を守るためにさまざまな運動を起こしたが、当時としてはかなり進歩的な思想のため民衆の指示を得たとはいえない。
- 15) ベンガルの中部に位置するノディア県は、高等教育の媒体言語であるサンスクリット語や文学、論理学、神話学などの中心地であった。そうした歴史的背景から、かつてはノディア県の主要都市のサンティプルやクリシュノゴルなどで話されるベンガル語が「標準ベンガル語」とされていた。

参考文献

Alagodi, S. D.

1985 Carey and Other Missions in Bengal. In *Carey Day: 224th Birth Anniversary of William Carey*, pp. 7-18. Serampore College(India).

アンダーソン、ベネディクト

1997 『増補想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』 白石さや・白石隆(訳)、NTT出版

Banerjee, T.

2000 Serampore College Towards Glorious Second Century. In *Carey Day: 239th Birth Anniversary of William Carey*, pp. 55-62. Serampore College(India).

Bayly, C. A.

1999 *Empire & Information-Intelligence Gathering and Social Communication in India, 1780-1870*. Cambridge University Press.

チャンドラ、ビパン

2001 『近代インドの歴史』 栗屋利江(訳)、山川出版社

Chatterjee, S. K.

1996 History of Printing in Bengal and Serampore Press. In *Indian Languages, References Sources, Bibliographical Control & Publishing Industry*. Gupta, B. M. (ed.), pp. 271-303. Segment Books(India).

Chatterjee, S. K.

1999 Serampore Trio-Carey, Marshman, Ward: The Pioneers of Modern missions in India. In *Carey Day:*

238th Birth Anniversary of William Carey, pp. 4-16. Serampore College(India).

浜渦 哲雄

1999 『大英帝国インド総督列伝：イギリスはいかにインドを統治したか』、中央公論新社

Ingham, K.

1956 *Reformers in India, 1793-1833: An Account of the work of Christian Missionaries on behalf of Social Reform*. Cambridge.

金 基淑

2000 『アザーンとホラ貝：インド・ベンガル地方の絵語り師の宗教と生活戦略』、明石書店

Marshall, P. J.

1987 *The New Cambridge History of India-Bengal: The British Bridgehead Eastern India 1740-1828*. Cambridge University Press.

Marshman, J. C.

1850 *Friend of India Weekly*, 23, May.

三瀬 利之

2002 「資料の歴史学—英領インド国勢調査資料の由来」『歴史叙述の現在』森明子(編)、pp. 36-63、人文書院。

三瀬 利之

2004 「インドーカーストの周辺概念としてのトライブ・レイス」『国勢調査の文化人類学』青柳真智子(編)、pp. 203-229、古今書院。

Neill F. B. A., Stephen

2002(1985) *History of Christianity in India, 1707-1858*. Cambridge University Press.

Sen Gupta, K. P.

1971 *The Christian Missionaries in Bengal 1793-1833*. Firma. K. L. Mukhopadhyay.

Serampore Mission House

1810 *Brief Memoirs of Four Christian Hidoos, Lately Deceased*. Serampore Press(India).

Sharma, J.

2003 Missionaries and Print Culture in Nineteenth-century Assam: The Orunodoi Periodical of the American Baptist Mission. In *Christian and Missionaries in India: Cross-cultural Communication since 1500, with Special Reference to Caste, Conversion, and Colonialism*. Frykenberg, R. E. (ed.), pp. 256-273. Routledge Curzon.

竹内 啓二

1991 『近代インド思想の源流：ラムモホン・ライの宗教・社会改革』、新評論。

Abstract

The Christian Mission and Media as Exemplified by the Serampore Mission in 19th century Bengal, India

Western printing technology was introduced to Bengal, India, by Christian missions in the late 18th century. The Serampore Mission of British Baptism played an important role in the publishing world throughout the first half of the 19th century. It had its own printing house, which published translations of the Bible into various local languages as well as producing many Bengali and English newspapers, magazines, and textbooks.

Western knowledge and information spread through this print media, which influenced new communities of knowledge that began to form among the Bengali people receiving modern education and working mainly as British India government officials. Many of them then associated themselves with progressive religious and social reform movements. On the other hand, Hindu Revivalists were also influenced by the print media and made good use of publications for their activities from the 19th century onward, developing the debate about reform of Bengal society with the progressive reformers. In this way, the new media brought a new form of debate culture into 19th century Bengal society.

Key-words: Bengal, Serampore Mission, print media, 19th century, new intelligentsia